

ナガ族におけるインパール作戦時の日本兵との接触の記憶と伝承 The Memories of Japanese Soldier during the Battle of Imphal among Naga People

太田 哲
Satoshi Ota

要約: インド北東部の少数民族であるナガ系諸族の調査を行った際多くの人から第二次世界大戦時のインパール作戦における日本兵との接触についての話があった。本稿はそれらの人々の語りを記録していくプロジェクトの一部であり、その中で3つの事例を紹介する。事例に入る前に第二次世界大戦時におけるビルマ方面の状況、インパール作戦の概要について説明し、その後ナガ居住地域におけるフィールドワークで得たナガのお年寄りの話を記す。本稿での事例はマニプル州ウクルール地区のハラン村とグリハン村において接触した人々の語りである。

キーワード: ナガ族、インパール作戦、記憶と語り、インド北東部

Abstract: This paper writes about Naga people who recall Japanese soldiers they met during World War II. Nagaland and hill area of Manipur where Naga people inhabit were the battle fields of Battle of Imphal and Kohima between Japan and the Allies. Because of the intensity of the battle, it is well known by Japanese people and many stories of the soldiers' experiences are written or broadcast on TV in Japan. However, the stories told by the local people in the battle grounds have scarcely been documented. This paper is a part of my project to document Naga people's stories of their encounter with Japanese soldiers. This research note includes the stories from three old Naga people from Halan village and Grihang village of Ukhrul district, Manipur.

Keywords: Naga, Battle of Imphal, Memory and Narrative, Northeast India

1. はじめに

本研究ノートは筆者が現在行っているナガ系諸族の間で第二次世界大戦時のインパール作戦における日本兵との接触がどのように記憶され、伝承されているかについての研究の経過報告である。

ナガ系諸族はインド北東部からミャンマー北西部に在住する少数民族で、いくつかのサブトライブから構成されている。サブトライブの数は Tohring (2010) によれば 66 ほどあり、インド国内であればナガランド州を中心に、マニプル州、アッサム州、アルナーチャルプラデーシュ州の一部にも居住している。本稿の表題には「ナガ族」と便宜上記したが、ナガ族という単体の部族はおらず、上記の 60 近くの部族の総称を「ナガ」と呼んでいる。ナガの歴史については本稿のテーマではないので本稿ではあまり深く触れないが、Vashum

(2005)によるとナガは各部族ごとに独立が保たれており、インドの王朝の支配下にはなく、はじめて外部の支配下になったのはイギリスがインド統治を行った後のことであった。インドがイギリスの支配下から独立する1947年にナガ系諸族の連合もインドの一部となる選択をせずに独立を宣言したが、その希望は叶えられず、インドの支配下となり、現在もその状態である (cf. Raikhan 2016)。このような背景からナガの人々の中にはインドの一部であることに対して不満を持っており、自治権の拡大や独立を志向する勢力も存在する。

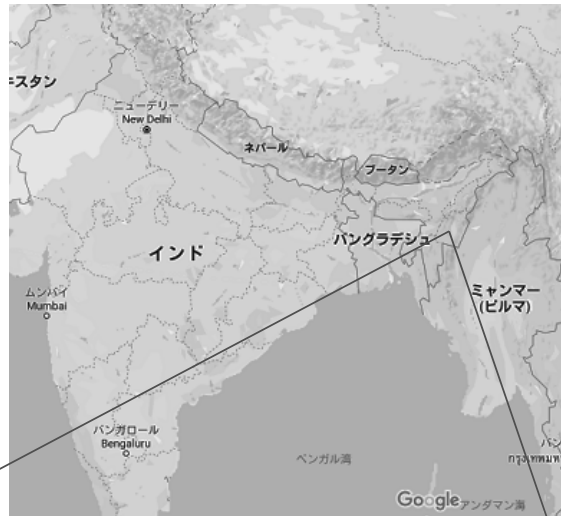


図1 Google Map

本稿で主に扱う範囲はインパール作戦の概要と筆者が接したナガの人々で日本兵との接触についての語りのいくつかをピックアップし、書き記す。本稿は2015年9月、2017年5月、2017年12月～2018年1月に行った調査を基に書かれており、調



図2 Google Map 筆者加筆

査地はマニプル州のタメロン地区、同じくマニプル州ウクルール地区ウクルール、ハラン村、フンプン村、グリハン村、ナンビシヤ村などの村々で行った。調査方法はエスノグラフィ手法を用い、各村で出会った人々に対し半構造的インタビューを行い、なるべく自由に多くのことを語ってもらえるよう心掛けた。ナガの村の人々にとって現在日本人と接触する機会は少なく、筆者がナガの村を訪れるとナガの人々は筆者に近づいて来て、お年寄りであればかつて日本兵と接触した話を積極的に話してくれた。また、日本兵と直接接触したことがない世代であっても、両親や祖父母の世代から聞いた話を彼/彼女らの方から

話してくれたので、ナガの人々の生の声を聞き易い環境であった。記録方法としてはノートテイキングを基本とし、相手の同意が得られれば録音機器やビデオカメラで録音や撮影を行った。若い人々は学校教育を英語で受けており、ほとんどの人は英語で会話を行うことが出来るため、若い人々と話をするときは英語で話をしたが、お年寄り世代で英語を介してのコミュニケーションが困難な人々に対しては現地の言葉で話してもらい通訳を介して聞き取りを行った。ナガの人々はサブトライブごとの言語があり、例えばアンガミ族に

おいてはアンガミ語を話している。マニプル州ウクルール地区においてはタンクール族が主要エスニックグループで、人々はタンクール語を話す。タンクールの場合は各村ごとにも言語があり、例えばハラン村においてはハラン村の言葉で話し、グリハン村においてはグリハン村の言葉を話す。グリハン村の人はハランの言葉が理解できず、逆もまた同じである。違う村の人々が交流するためにはタンクール語を使用する。



図3:1942年時の日本の勢力圏

本プロジェクトを始めるに至ったのは、ナガの村に他の目的で調査に訪れた際、必ずと言っていいほど村の人々から第二次世界大戦における日本軍との接触について話がされ、ナガの人々の間では記憶に残る出来事であることがうかがわれ、ナガを研究対象とする一研究者として記録しておく必要を感じたからである。日本軍との接触についての話は、直接体験したお年寄り世代のみならず、若い世代の間でも語り継がれており、若い人からも日本軍の話聞くことが多かった。また、村に訪れると爆弾や砲弾、日本兵が着用していたヘルメットなども残されており、戦争の残滓が未だにこの地域では存在している。

2. Japan War

ナガの人々と戦争の話をしたとき、Japan Warという言葉をよく耳にした。ナガの人々の間では第二次世界大戦のことをJapan Warと表現している。それまで日本人を見たことがなく、日本人が突然村々に出現し、戦争が始まったことからJapan Warと呼んでいるそう。本節ではインパール作戦の概要を日本側の資料を基に述べる。

2.1 大東亜共栄圏と日本のビルマ侵攻

図3に示すとおり、第二次世界大戦時、日本は「大東亜共栄圏」の名の下、北東アジアや東南アジア、南洋諸島に勢力を拡大した¹。欧米列強からのアジアの開放をスローガンに南方に侵攻した日本であったが内実は資源確保を目的としていた(平井 2010)²。山本(2011)も日本は南方から石油をはじめとする資源確保と日本本土および植民地を守る理由からそれらの地域に進出したと述べている。

1941年12月8日の真珠湾攻撃によって太平洋戦争は開始し、開戦当初は日本軍に勢いがあり、マレー半島、シンガポールなどを占領した。シンガポールは英国海軍にとって重要な港があり、そのシンガポールを陥落させたことは日本軍にとって自信となった。

太平洋戦争開始以前に日本は中華民国に対し戦争を仕掛けており、イギリスやアメリカは中国に対し武器や、石油、物資などを提供していた。これらのものを提供するルートはいわゆる援蒋ルートと呼んでおり、戦史叢書『ビルマ攻略作戦』(1967)によるとそれらは主に四つあった。1. 香港を中心として中、南支沿岸各地を経て奥地に向かうルート(いわゆる香港ルート)、2. 甘粛、新疆を経てソ連を結ぶルート(いわゆる西北ルート)、3. ハイフォン、昆明を結ぶルート(いわゆる仏印ルート)、4. ラングーン、ラシオ、昆明を結ぶルート(いわゆるビルマルート)である(戦史叢書 1967)。日本軍はビルマルートを遮断するためビルマ侵攻を試みた。1942年1月日本軍先発隊はビルマ独立義勇軍と共にタイ国境を越えてビルマに侵入し、3月には首都ラングーンを占領した(戦史叢書 1967)。

ビルマ占領によって陸路による援蒋ルートは遮断されたが、連合軍はインド・アッサム州の空港から中国の昆明まで空路で物資を運んだ。このルート「ハンブ」と呼ばれ、8000メートル級のヒマラヤ山脈を越えなければならなかったことや、気流も悪かったため、飛行はかなり困難であった(戦史叢書 1967)。また、陸路においても遮断されたビルマルートを補うためにアッサムのレドからビルマのミイトキーナを経由し、中国の龍陵、保山を経て昆明に至るいわゆるレド公路を連合軍は建設した(戦史叢書 1968)。

2.2 インパール作戦の成立

日本軍のインドに対する関心は太平洋戦争開始前からあったという証言もあるが(NHK取材班 1995)、作戦計画が軍の俎上に上がってきたのは戦史叢書(1967)によると、1942

年になってからである。まずは大本營の杉山參謀總長から南方軍にインド進行の施策を考えるよう打電し、南方軍が作戦計画案を作成した。それを受け、大本營は南方軍に正式に作戦立案を指示し、「二十一号作戦」と名付けた。この「二十一号作戦」が後のいわゆるインパール作戦の土台となるのだが、計画が立案された1942年当時は無謀な作戦だとして現場にいる第十五軍の人々を中心に反対され、作戦は「保留」されることとなった。

一旦は保留されたインド侵攻計画が再び現実味を帯びてきたのは1943年になってからで、その時第十五軍司令官に就任した牟田口廉也中将の意向が大きく影響した(戦史叢書1968)。牟田口は第二十一号作戦が検討された当時第十八師団の師団長で、当時の第十五軍飯田司令官から作戦の成否を聞かれた際実行困難と回答したが(戦史叢書1968)、第十五軍司令官

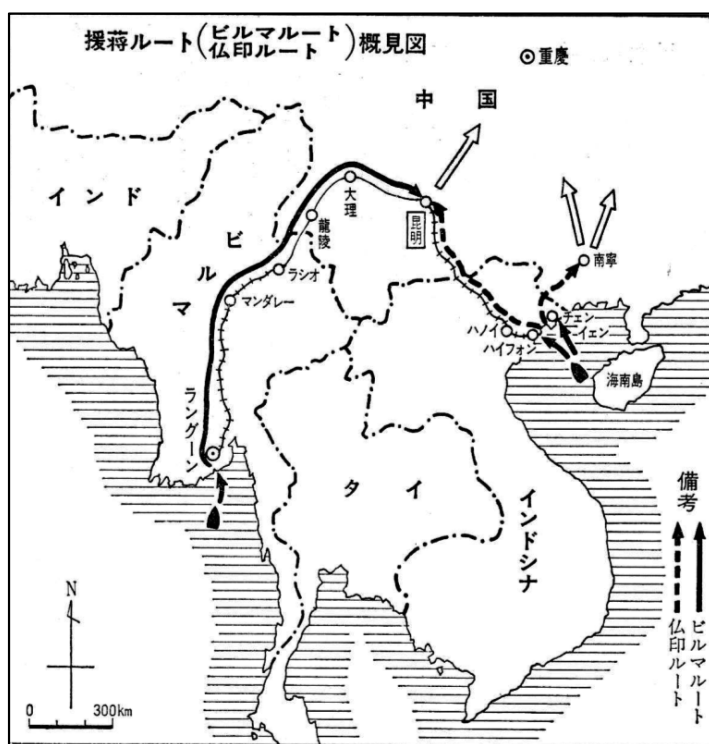


図4 援蒋ルート(ビルマルート、仏印ルート)

に就任した後、次第にインド侵攻を推進するように変化していった。

インド侵攻に関してはその無謀な計画から軍部内では反対意見が大勢を占めていた。しかしながら、牟田口中将の強い意向と当時の情勢を鑑み東条英機首相はビルマの独立をテコにインドの独立も画策していたことから、インド方面に対する意識は向いていた。

NHK取材班(1997)によると牟田口中将

の強い意向と当時の軍部の馴れ合い的な「空気を読む」意思決定の傾向が相まってインパール作戦(「ウ」号作戦)の実施が成立したと述べ、戦史叢書(1968)においても牟田口中将のインパール作戦への強い意向について書かれている。

2.3 インパール作戦

1944年1月7日大本營はインパール作戦の指令を下し、それを受け南方軍が1月15日に実施命令を下達した。そして1月19日にビルマ方面軍が第十五軍に対し同作戦の実施を

下達し、第十五軍は1月25日にインパール作戦のための軍展開命令を下した（戦史叢書1968）。

作戦開始は3月8日で、第33師団がインパールの南東方面からチンドウィン川を渡り、3月15日に第15師団がインパールの西方から、第31師団がインパール北西からコヒマに向かい進軍した（戦史叢書1968）。インパール作戦の問題は多くの書物で指摘されているように、補給路の確保に大きな問題があった。牟田口司令官は「ジンギスカン作戦」と称し、牛に武器や食料などを運ばせ、現地に到着したらそれらを食料として使用する計画を立てたが、チンドウィン川を渡る際に既に半数以上が溺れ死んだと言われている（NHK取材班1997）。

日本軍の作戦は短期決戦で終わらせる予定であった。作戦開始当初は攻勢であったが、連合軍の空輸作戦などが功を奏したことと、日本軍自身の補給計画の欠如から戦況は次第に劣勢になっていった。また、作戦開始時の3月は乾季であり、作戦は短期で終わる目論見であったが、戦況が長引き、雨季に入ると戦況は更に悪化した。作戦の失敗は5月の時点で濃厚となっていたが、結局撤退命令が出たのが、7月に入ってからであった。食糧の補給がないままの雨季のジャングルでの撤退は凄惨を極め、多くの犠牲者を出した。撤退時の道では多くの餓死者や病死者が出たことから「白骨街道」と呼ばれた（NHK取材班1997）。撤退の様子は生き残った元兵士達によって記されており（黒岩2004、井坂2008、斉藤1999）、その悲惨さをうかがい知ることが出来る。

3. Japan War についての語り

インパール作戦において起こった出来事について日本側の証言は帰還兵によって書かれた出版物やテレビのドキュメンタリー番組などにおける元兵士のインタビューなどでかなり多く記録されている。それに比べ戦場となった地域に住んでいる現地の人々の声は現地の人々の中では語り継がれているものの、媒体によって記録されたものは多くない。本節においては現地調査で見聞きしたナガの人々の日本兵接触についての語りの事例をいくつか取り上げ書き記す。

その一つに2017年5月に訪れたウクルール近くのハラン村において何人かのお年寄りか日本軍との接触について話をしてくれた。一人は非常に幼い時に日本の兵士と遭遇したという高齢女性だ。

日本の兵士が村にやってきて、家々の戸を叩いて来た。自分はまだ幼く、怖かったので物陰に隠れており、日本の兵士が入って来ると道を聞いていた。日本兵に加えインド国民軍の兵士がいた。村人の何人かは人夫として駆り出され、日本軍のために武器などの運搬を手伝った。飢えて弱っている日本兵にも遭遇し、彼らは手を差し出しながら「クリ、クリ」と言っていた³。

同じハラン村で、別の高齢男性が日本兵との接触について話をしてくれた。

日本兵はシャンシャック村方面からやって来て、イギリス兵と戦闘を行った。その後イギリスから空爆を受けた⁴。幸運なことにこの空爆において死者はいなかった。日本軍の主力部隊はその後コヒマの方へ進軍していった。残った部隊は毎朝朝礼を行い、その後朝食を準備させた。朝食は全員の分をまとめて料理するのではなく、各自が飯盒でもって米を炊き食事の準備をしていた。箸を使って食べていた。日本兵は3月の終わりか4月の初めに来てこの村に2ヶ月ぐらい駐留していた。この村は中継キャンプとして使われていたようで、ある部隊が来ては出ていき、また別の部隊がやって来ては出ていった。日本兵は村人たちに対しては特にひどいことはしなかった。たまに食糧を奪う程度であった。彼らは飢えていたのであろう。それから、犬や、水牛を殺すようにと村人に命じたことはあった。その際にはそれに対して対価を払うことはやっていた。インド国民軍の兵士が先導していることもあった。日本兵と村人とのコミュニケーションは英語かビルマ語で行われた。村人の中に教育を受けた人がいて英語を話す人がいたし、ビルマ語を話す人もいた。日本兵の中にも英語を話す者もいればビルマ語を話す者もいた。日本兵が去った後、イギリス兵がやって来た。イギリス兵がやってくるということで日本兵は向こうの丘のノンピ村に撤退し、そこからイギリス兵に対し攻撃を仕掛けた。この村に対して砲撃を加え、3発命中した。それによって3人の村人が死に、1人のイギリス兵が死んだ。

3つ目の事例は2018年1月にウクルール地区グリハン村で調査を行った際、その村のお年寄りから聞いた事例である。彼は戦争中日本軍の伝令係を行ったと言った。

日本軍がタナ村に来ているから迎えに行けと言われ、タナ村へ行き、それから日本軍をシャンシャック村まで案内した。それによって80ルピーを得た。日本人はナガがイギリス軍を助けているのではないかと疑っており、イギリス軍はナガが日本軍を助けているのではないかと疑っていた。日本軍が来たときは自分は既に結婚していて息子が二人いた。日本軍は私に危害を加えることはなく、私と寝食を共にした。私が知っている限りではこの村辺りで戦闘は行われておらず、村人が殺されたという話も聞いていない。

4. 結びにかえて

本稿は第二次世界大戦におけるインパール作戦で日本兵と接触したナガの人々がどのように記憶し、語っているのかに対して調査をし、その一部を書き記した。このプロジェクト自体がまだ実施中のものであるため本研究ノートにおいては聞き取りの一部しか紹介す

ることが出来ないが、今後改めてナガの人々の語りの記録を行っていく。本稿においては日本兵と過去に直接接触したお年寄りの記憶について記したが、次回以降の研究ノート等で直接接触した経験がない世代においてもこの話がどのように語り継がれているかについても触れていきたい。

今回紹介した事例において共通することはナガの人々にとって「日本人」と接触することは初めてのことであったため、記憶にかなり鮮明に残っており、外見が自分たちとそう変わらないことから多少の親近感があったことを話していた。特に最後に紹介したお年寄りには、道案内をする際に日本兵は自分と寝食を共にしたということからネガティブな感情は持っていなかったようである。ただ、多くの日本側の証言や書物にもあるように、物資補給計画が杜撰であったため、兵士の多くは飢えていた。そのことが行動にも反映され現地の人々の食糧を奪うこともしばしば行われ、それらが現地の人々の記憶にも残っており、現在においてもその記憶が村人の中で共有されていた。

注

- 1 引用元 URL:
http://fdr4freedom.org/wp-content/themes/dfd4fdr/images/universe/universe4/11-tumblr_mtlmwb5eD61s6c1p2o1_1280_web.jpg. アクセス日 2018 年 11 月 26 日
- 2 後藤 (2013) によれば第二次世界大戦当時日本では東南アジアという言葉は一般的ではなく、現在の ASEAN 地域は南方という呼称の方が一般的に使われていた。
- 3 彼女がここで言っている「クリ、クリ」は文脈上飢えた日本兵が村人に対し食糧を「くれ、くれ」と言っていたと解釈できる。
- 4 日本軍はビルマを占領していたが、制空権は連合軍に握られており、連合軍は空爆や、物資の補給などによって戦況を優位に進めることが出来た (戦史叢書 1968)。

参考文献

- 井坂源嗣 (2008) 『弓兵团インパール戦記』 光文社 NF 文庫
NHK 取材班 (編) (1997) 『太平洋戦争日本の敗因 責任なき戦場インパール』 角川ソフィア文庫
黒岩正幸 (2004) 『インパール兵隊戦記』 光文社 NF 文庫
後藤乾一 (2013) 「アジア太平洋戦争と東南アジア」『外交史料館報』 27 号、1-25 頁
斎藤政治 (1999) 『列兵团インパール戦記』 光文社 NF 文庫
戦史叢書 (1967) 『ビルマ攻略作戦』 防衛庁防衛研修所、朝雲新聞社
戦史叢書 (1968) 『インパール作戦 - ビルマの防衛』 防衛庁防衛研修所、朝雲新聞社
平井廣一 (2010) 「「大東亜共栄圏」期の日本の物資供給」『北星論集』 第 50 巻 第 1 号 (通巻第 58 号)、抜刷 1-16 頁
山本有造 (2011) 『「大東亜共栄圏」経済誌研究』 名古屋大学出版
Raikhan, Home (2016) *Naga History: Through a Clan and Tribe*, Guwahati: Spectrum Publications
Tohring, S. R. (2010) *Violence and Identity in North-east India: Naga-kuki Conflict*, New Delhi: Mittal Publications

Vashum, R. (2005) *Naga's Right to Self-Determination*, 2nd ed., New Delhi: Mittal Publications

Received on 22 December 2018